

乳児の泣きに対する父親の認知プロセスの特徴

——夫婦の情報共有との関連から——

小山 里織¹・森山 雅子²・小林佐知子³
小原 倫子⁴・西野 泰代¹

(受付 2019年10月31日)

要 旨

本研究では、子どもの泣きを父親がどのように受け止めて原因を解釈しているかという認知プロセスについて、日常的な家庭場面の泣きに焦点を当て、父親と母親に対するジョイント・インタビューからその詳細を明らかにすることを第1の目的とした。さらに、2ヵ月と4ヵ月を比較することで泣きの認知プロセスの発達について検討することを第2の目的とした。2ヵ月の乳児をもつ夫婦10組に対して、2ヵ月と4ヵ月の時期に家庭訪問をして夫婦を対象に面接調査を行った。対象児はすべて第一子であった。近日中の泣きの中から〔母親在室場面〕と〔母親不在場面〕の泣きのエピソードを回答してもらった。2ヵ月31エピソードと4ヵ月29エピソードの合計60エピソードを分析対象とした。

子どもの泣きに対する父親の語りは「知覚」「状況」「解釈」「対処」の4つのカテゴリーで構成され、さらに各カテゴリーは複数の下位カテゴリー及びサブカテゴリーで構成されていた。両時期における各カテゴリーの出現頻度の特徴として、2ヵ月における父親の泣きの解釈は〈生理的欲求〉が多かった。一方、4ヵ月では〈生理的欲求〉による解釈が減少し、〈社会的欲求〉による解釈が多かった。このような父親の泣きに対する解釈の特徴は母親を対象とした研究知見と同様の傾向であった。さらに、各月齢の具体的なエピソードの語りから、父親の認知プロセスは2ヵ月と4ヵ月の子どもの発達の特徴に対応したものであることが示された。これらの結果から泣きに対する父親の認知プロセスは子どもの発達に伴い変化することが示唆されたと考えられる。その他、〈解釈〉の下位カテゴリーに〈解釈しない：「何も考えなかった」「赤ちゃんは泣くもの」〉が一定の割合で示された点は、母親の認知プロセスに認められなかった結果であり本研究の新たな知見といえよう。

キーワード 父親、泣きの認知、ジョイント・インタビュー

¹広島修道大学健康科学部

²愛知江南短期大学

³静岡県立大学短期大学部

⁴岡崎女子大学子ども教育学部

問題と目的

子どもが泣いたとき父親はその泣きをどのように認知しているのであろうか。本研究では子どもの泣きに対する父親の認知プロセスに焦点をあて父親の発達について検討する。

子どもにとっての泣きは、「音の臍帯」(Sander & Julia, 1966)とみなされるように、生命を維持するための情報を伝達するうえで欠くことのできない手段であると同時に、養育者との信頼関係を築く上でも重要な意味を持つ(Bell & Ainsworth, 1972)。一方、親にとっても子どもの泣きに適切に対処できたかどうかは養育スキルを形成していく過程で重要な意味を持つ(陳, 1986)。親としての発達の側面から子どもの泣きを扱った研究によると、泣きの生起原因をどのように解釈するかが養育行動にとって重要であると考えられている。特に看護や助産の分野では、母親が子どもの泣きに適切に対応できるようなサポートの充実、育児不安や虐待の防止を目的として、生後早期における子どもの泣きに対する母親の情動反応や泣きの解釈を解明するための研究が行われてきた(難波・松岡・川越, 1997; 田淵, 1999; 田淵・島田, 2006; 嶋田・坂倉, 2007; Tabuchi, Shimada, Kameda, Sekizuka, & Sakai, 2008)。例えば、難波・松岡・川越(1997)は、母親が、出産後1～2週間という極めて早期の段階において、子どもの泣き方、表情・体の動きなどから泣きの原因を解釈して、対処行動をとることを明らかにした。また、田淵(1999)は、子どもの泣きに対する母親の反応について検討し、子どもの泣き声を耳にした母親は、「感情・情動反応」と「認知的反応」が同時に起こり、次いで「泣きの解釈」、「対処行動」というプロセスを辿ることを明らかにした。さらに、「泣きの解釈」の関連要因として、時間経過と泣きの特徴を指摘し、産後早期の母親を支援する方向性を示唆した。母親の泣きへの反応は泣き声の特性、表情や体の動きなどの特徴的な泣きの知覚と、授乳やオムツ交換の時間経過など全体的な状況から泣きの生起原因を解釈して、対処行動をとるというプロセスを辿るといえる。これらの研究結果は、養育者が泣きに対して適切に対処するために泣きをどのように解釈しているかが重要となることを指摘するものである。この見解は子どもの泣き声の生起原因をうまく推定できずに適切な認知プロセスを踏めない場合、母親の育児ストレスが高くなるという知見(神谷, 1999)とも一致しているといえるだろう。したがって、母親の養育行動を支援するうえで、泣きの認知プロセスに着目することには意味があると考えられる。

子どもの泣きの認知については、父親の発達を扱う研究の中でも検討されてきた。そこでは、父親と母親で子どもの泣きの認知に差がないことが示された(神谷, 1999; Gustafsson, Levrero, Reby, & Mathevon, 2013)。さらに神谷(2002)によると父親も日々の子どもの間わりを通して泣きへの認知プロセスを形成しており、それは産前から準備されているという。

また、父親が子どもの出産をどのようにとらえているのかが、父親の泣きの知覚に影響していることが指摘されている (Winkander & Theorell, 1997)。これらの知見から、父親の泣きの認知プロセスは、妻の妊娠、子どもの誕生、そして育児を通して形成されていくものであることが推測される。しかしながら、親の発達の視点から子どもの泣きについて検討した研究を概観しても、実際の日常場面で父親が自分の子どもの泣き声をどのように認知しているかについて検討されることはなかった。泣きをどのように受け止めて解釈しているのかが養育行動にとって重要であるとするならば、父親の泣きの認知プロセスを明らかにすることで、父親がどのように養育スキルを獲得するのかについて知る手がかりを得ることに繋がると考える。

そこで本研究では、子どもの泣きを父親がどのように受け止めて原因を解釈しているのかという認知プロセスについて、日常的な家庭場面における泣きに焦点を当て、ジョイント・インタビューによる父親と母親の語りからその詳細を明らかにすることを目的とした。さらに、2ヵ月と4ヵ月を比較することで泣きの認知プロセスの発達について検討することを第2の目的とした。生後2ヵ月では、子どもは、快の表現が明確になり、クーイングと呼ばれる発声や微笑がみられるようになり (平嶋, 2007) 父親にとって子どもと関わりやすくなる最初の時期と考える。また、4ヵ月は、子どもは周囲の人に対する反応と異なる反応を母親に対して示すようになる (平嶋, 2007)。例えば、子どもは母親にあやされれば泣き止み、母親が視界から消えると泣きだし、再び姿を見せれば歓迎する。したがって、父子関係に対しても変化が現れる時期と考えられる。2ヵ月と4ヵ月を比較することによって、育児期における初期の子どもの泣きに対する父親の認知プロセスの発達について詳細にとらえることができると思う。

方 法

対象者：調査開始時に生後2ヵ月の乳児を持つ夫婦10組。調査開始時の平均年齢は父親30.0 (26-39) 歳、母親30.3 (26-41) 歳であった。対象児はすべて第一子 (男児2名、女児8名) であった。

調査時期：2017年2月～2018年7月。

手続き：知り合いを通して紹介を受けた夫婦10組に対して、子どもが2ヵ月と4ヵ月の時期に家庭訪問をして半構造化面接を行った。泣き声に対する反応は複雑な要因の絡みによって生ずるものであって、単純に刺激に対する反応という考え方では把握しきれない。特に自然場面の泣き声に対する反応や対処は、実験用として作成された泣き声に対する反応とは一致しない (陳, 1986)。本研究では実験ではとらえきれない自然な日常シーンの泣きをとらえ

るためにジョイント・インタビューを実施し泣きの認知プロセスを検討した。この方法では夫婦同時に面接することによって、同じエピソードに対する二人分の評価や説明が得られる。また、母親と父親が一緒にいるときの泣き場面のエピソードでは、インタビュー中に夫婦のやり取りが再現されたり、正確な情報へ修正されることがあることからよりリアルな情報が得られることが期待できる。さらに、インタビュー中の夫婦のコミュニケーションから、父親の泣きの認知プロセスへの母親の要因を図ることができると推測される。

調査内容：子どもが泣いたときに父親が同室していることを条件として、近日中の日常的な子どもの泣き場面について母親在室場面（以下、〔在室場面〕）と母親不在場面（以下、〔不在場面〕）を2～3エピソード程度回答してもらった。まず父親に対して想起しやすいエピソードとして、インタビューの時点からさかのぼって最も近い泣き場面から順に話してもらった。泣きのエピソードでは、①子どもの様子：「いつ、どこにいましたか?」「お子さんはどんな様子でしたか?」、②泣いた理由：「なぜ泣いたと思いますか?」、③対処：「何かされましたか?」、④結果：「どうなりましたか?」、⑤泣き止まなかった場合の対処：「その後、どうされましたか?」が順に記されてある用紙をみせながら質問内容の教示をした後、一つのエピソードについて父親の語りを終了してから次に母親に対して同じエピソードについて同じ手順で質問することを伝えた。父親の回答中に母親が回答したり、父親が母親に回答を求めた場合は、会話を中断せず自然な流れで回答をしてもらった。なお、面接内容は事前に対象の許可を得てICレコーダーに録音し、後日逐語録を作成した。

倫理的配慮

面接開始にあたり、研究の趣旨、内容、情報の取り扱い等について文書及び口頭で説明したのち、対象者が研究参加に同意した場合、同意文書に夫婦による署名を得た。また、研究が実施又は継続されることに同意した場合であっても随時これを撤回できることについても文書及び口頭で説明した。なお、本調査の実施にあたっては、県立広島大学研究倫理審査によって審査され、研究の実施が承認されている（承認番号：第17MH043号）。

分析方法

子どもが泣き始めてから泣き止むまでの語りを一つのエピソードとし、一組の夫婦から各月齢で平均3エピソードを語ってもらい、2ヵ月31エピソード（〔在室場面〕16エピソード、〔不在場面〕15エピソード）と4ヵ月29エピソード（〔在室場面〕16エピソード、〔不在場面〕13エピソード）の合計60エピソードを分析対象とした。まず、エピソードを意味のあるまと

まり（一つの内容を表す句，および文）に区切り，その内容を表すラベルをつけた。その際，できるだけ正確に泣きの認知プロセスを把握するために父親が語った表現を用いることを心掛けた。そして，ラベルの類似性に基づいて，母親の認知プロセス（難波・松岡・川越，1997；田淵，1999）を参考に上位のカテゴリーを作成した。上位のカテゴリーにまとめる際には，文脈を確認しながら，内容を吟味しこれ以上まとまらないところまで作業を進めた。

結果と考察

1. 泣きに対する父親の語りのカテゴリー化

子どもの泣きに対する父親の語りは「知覚」「状況」「解釈」「対処」の4つのカテゴリーで構成され，さらに各カテゴリーは下位カテゴリー及びサブカテゴリーで構成されていた（Table 1）。

「知覚」は父親が泣きと意味づけた感覚情報の語りで，〈声の特徴〉と〈子どもの様相〉の2つの下位カテゴリーで構成されていた。〈声の特徴〉は声の大きさ，トーン，声が出る間隔，持続時間，泣き方の模倣などで，「低い声」「尋常じゃない大きな声」「ギャーギャー」などの語りがあった。〈子どもの様相〉は泣いている時の顔色，表情，手足など体の動きである。「顔を真っ赤にしてわーって暴れる」「足をばたつかせる」「顔がくしゃって」などの様相が語られた。

「状況」は泣き原因の解釈に関連した状況の語りであり，〈時間〉〈一人〉〈経験〉〈母親の準備・助言〉〈その他〉の5つの下位カテゴリーで構成されていた。さらに〈時間〉は〈時間経過・時間帯・日課〉の3つのサブカテゴリーで構成されていた。〈時間：時間経過〉は前回の授乳からの時間経過であり，「お腹が空くのが2時間から3時間だからもうそろそろ」「時間からミルクだなんていう感じになる」など父親が日々の授乳スケジュールを把握している内容が語られた。〈時間：時間帯〉は泣きやすい時間帯や，逆に子どもが起きていて機嫌のいい時間帯を把握している語りであり「夕方で泣く時間だった」「眠いような時間でもない」などであった。〈時間：日課〉はお風呂の前後や寝る前など，時間制約のあるルーチンケアと泣きを結びつけた語りであった。例えば「お風呂上がりのタイミング」「夜，寝る前が激しくて」などである。〈一人〉は父親と母親から相手にされず自分一人にされているような状況や，子どもの視界から親の姿が見えない状況であり「僕たち二人が見えなくなったら泣き出す」「気づくと一人しかいないっていうか…。」などである。〈経験〉は経験した状況と現在の状況とを重ね合わせている語りで「今月に入って何回か（こういう泣きが）あって」「何度かこういうのがあって」などであった。〈母親の準備・助言〉は母親自身が不在になる前にケアの準備をしたり，父親にケアについて助言したことの語りであった。「M：9時ぎりぎりに授乳をし

Table 1 泣きに対する父親の語りのカテゴリーの定義と語り例

カテゴリー	下位カテゴリー (サブカテゴリー)	定義	語り例	2ヵ月		4ヵ月		
				母在室	母不在	母在室	母不在	
知覚	声の特徴	声の大きさ、トーン、間隔、持続時間、模倣など	「低い声」「尋常じゃない大きな声」「ギャーギャー」「フェーン」「ウェー」	62.5 (10)	66.7 (10)	37.5 (6)	53.8 (7)	
	子どもの様相	顔色、表情、手足の動きなど	「顔を真っ赤にしてわーって暴れる」「足をばたつかせる」「顔がクシャって」「全身で泣いている」	18.8 (3)	20.0 (3)	31.3 (5)	30.8 (4)	
	時間経過	前回の授乳からの時間経過	「お腹が空くのが2時間から3時間だからもうそろそろ」「時間からミルクだになっていう感じになる」	31.3 (5)	40.0 (6)	12.5 (2)	30.8 (4)	
状況	時間	時間経過	「夕方まで泣く時間だった」「眠いような時間でもない」	6.3 (1)	26.7 (4)	6.3 (1)	0	
	時間帯	泣きやすい時間帯、起きている時間帯	「夕方まで泣く時間だった」「眠いような時間でもない」	6.3 (1)	26.7 (4)	6.3 (1)	0	
	日課	お風呂の前後、寝る前	「お風呂上がりのタイミング」「夜、寝る前が激しくて」	31.3 (5)	20.0 (3)	43.8 (7)	15.4 (2)	
	一人	気づくと一人、視界から親が見えない	「僕たち二人が見えなくなったら泣き出す」「気づくと一人しかいないって言うか…。」	12.5 (2)	0	25.0 (4)	23.1 (3)	
	経験	経験したことがある状況	「今月に入って何回かあって」「何度かこういうのがあって」	6.3 (1)	6.7 (1)	12.5 (2)	7.7 (1)	
	母親の準備・助言	不在前に授乳をする、授乳時間を伝える	「M：9時ぎりぎりに授乳をした。「こうやってやってね」と言って」「M：出る直前に飲ませて、それだけは伝えました」	12.5 (2)	33.3 (5)	6.3 (1)	0	
	その他	育児用品	「オムツのラインの色」「オムツの感じから」	6.3 (1)	13.3 (2)	0	0	
解釈	生理的欲求	空腹	「お腹が空いた」「もうそろそろミルクかな」	25.0 (4)	40.0 (6)	18.8 (3)	0	
	オムツ	オムツが汚れた	「うんちかな」「オムツかな」	25.0 (4)	46.7 (7)	0	0	
	眠たい	眠たい	「眠たくなると機嫌が悪くなる」	18.8 (3)	13.3 (2)	31.3 (5)	23.1 (3)	
	社会的欲求	母親	母親が傍にいない不安	「お母さんなんでしょ」「お母さんがいなくなるとすぐに泣く」	6.3 (1)	6.7 (1)	37.5 (6)	46.2 (6)
	関心	自分に関心を向けて欲しい	「かまって欲しい」「つまらない」	18.8 (3)	0	0	0	
	行動傾向	子どもの好み、嗜好	「ミルクが嫌い」「縦抱きが好き」	0	0	6.3 (1)	23.1 (3)	
	解釈しない	泣き原因を解釈しない	「何も考えなかった」「赤ちゃんはなくもの」	31.3 (5)	33.3 (5)	18.8 (3)	38.5 (5)	
	体調	痛みや苦痛のため	「げっぷがでなくて苦しい」「暑い」	0	0	6.3 (1)	7.7 (1)	
	不明	原因が分からない	「何でだろう」「どうしたんだろう」	0.0	6.7 (1)	6.3 (1)	7.7 (1)	
	抱く	抱いてあやす	「歩き回る」「抱き上げてあやす」	43.8 (7)	46.7 (7)	43.8 (7)	76.9 (10)	
対処	オムツ	オムツ交換する	「触って濡れている感じだったので交換しました」「オムツを見てみた」	25.0 (4)	46.7 (7)	0	0	
	授乳	ミルクや搾乳を飲ませる	「ミルクを飲ませた」「搾乳を飲ませる」	6.3 (1)	20.0 (3)	0	7.7 (1)	
	母親	母親を呼ぶ、母親に渡す	「母親のところに連れて行く」「任せたという感じ」	31.3 (5)	-	56.3 (9)	-	
	接触	体の一部に触れる	「手を触る」「お腹をとんとんと叩く」	0	6.7 (1)	6.3 (1)	7.7 (1)	
	様子を見る	気にしながら様子を見る	「しばらく様子を見る」「少し見てました」	6.3 (1)	13.3 (2)	0	30.8 (4)	
	何もしない	関心を示すことなくそばにいる	「大きな泣き声でなければそのままです」「テレビ見てました」	25.0 (4)	0	18.8 (3)	7.7 (1)	
	その他	その他	「玩具を渡す」「パウンサーをゆらす」「音楽を聞かせる」	0	0	0	15.4 (2)	

注1 表中の数字は各場面のエピソード数に対する割合 (%) であり、括弧内の数字は各場面で語られた頻度を示す。

注2 Mは母親の語りを示す。

た。『こうやってやってね』と言って」「M：出る直前に飲ませて、それだけは伝えました」。〈その他〉は育児用品の変化を把握している語りであり「オムツのラインの色が変わっていた」「オムツを触った感じから」などの語りである。

「解釈」は、子どもの要求が何であるか見極めようとするものであり、泣きの原因について自分なりに考えて理解したことを示す語りである。単に原因を挙げるだけや母親の促しによって父親が語った場合は「解釈」に含めなかった（例：「オムツかミルクかしか考えていない」など）。判断が難しい語りは文脈から検討し研究者間で協議の上決定した。その結果、「解釈」は〈生理的欲求〉、〈社会的欲求〉、〈行動傾向〉、〈解釈しない〉、〈体調〉、〈不明〉の6つの下位カテゴリーで構成されていた。さらに〈生理的欲求〉は〈空腹・オムツ・眠たい〉の3つのサブカテゴリーをもち、〈社会的欲求〉には〈母親・関心〉の2つのサブカテゴリーがあった。〈生理的欲求：空腹・オムツ・眠たい〉は食欲・排泄欲・睡眠欲を示すものであり、「お腹がすいた」「もうそろそろミルク（の時間）かな」「オムツ（が汚れた）かな」「眠たくなると機嫌が悪くなる」などの語りがあった。〈社会的欲求：母親〉は母親がそばにいないことに対する不安欲求であり「お母さんなんでしょ」「お母さんがいなくなるとすぐに泣く」などが多く語られた。〈社会的欲求：関心〉は両親の関心を期待する欲求であり「かまってほしい」「つまらない」など語られた。〈行動傾向〉は子どもの好みや嗜好の語りであり「ミルクが嫌い」「縦抱きが好き」などであった。〈解釈しない〉は泣きの原因を解釈しないことであり「何も考えなかった」「赤ちゃんはなくもの」など積極的に泣きに介入しない語りであった。〈体調〉は痛みや苦痛に帰属する内容で「げっぷが出なくて苦しい」「暑い」などである。〈不明〉は解釈しようとしたが泣いている原因が分からないというもので「何でだろう」「どうしたんだろう」などと心配している文脈やいろいろな対処を試みた結果、泣き止まないときに語られた。

「対処」は泣きへの対処行動であり〈抱く〉、〈オムツ〉、〈授乳〉、〈母親〉、〈接触〉、〈様子を見る〉、〈何もしない〉、〈その他〉の8つ下位カテゴリーで構成されていた。〈抱く〉は抱いて子どもをあやす対処行動であり「歩き回る」「抱き上げてあやす」といった語りであった。〈オムツ〉はオムツをチェックしたり交換する対処行動で「触って濡れている感じだったので交換しました」「オムツを見てみた」などであった。〈授乳〉はミルクや搾乳を飲ませる対処行動であり「ミルクを飲ませた」「搾乳を飲ませた」と語られた。〈母親〉は母親への依頼を意味するものであり「母親のところに連れて行く」「（母親に）任せたいという感じで渡します」などがあった。父親が何らかの形でかかわった後に母親が対処した場合の語りが多かった。〈接触〉は子どもの体の一部に触れる対処行動であり「手を触る」「お腹をとんとんと叩く」などであった。〈様子を見る〉は泣いている子どもを気かけながら見ることであり。「しばらく様子を見た」「少し見ていました」などの語りであった。〈何もしない〉は泣き始めた時

から全く関わることがなかったエピソードの中で語られ、「大きな泣き声でなければそのままです」「テレビ見ていました」など、父親はテレビや仕事に集中し泣いている子どもを気にかけることがなかったことから〈様子を見る〉とは別のカテゴリーとした。〈その他〉には「玩具を渡す」「バウンサーをゆらす」「音楽を聞かせる」という語りがあった。

これらの結果から、父親は生後数ヶ月という育児期の早い段階で子どもの泣きに対して「知覚」「状況」「解釈」という認知プロセスを経て「対処」していると考えられる。母親にとって泣き声の音響学的な特性のみが泣きを解釈するための唯一の要因ではないように(正高, 1989), 父親も〈声の特徴〉や〈子どもの様相〉という泣きの「知覚」と〈時間経過〉〈時間帯〉〈日課〉といった時間の把握や, 〈一人〉という子どもが置かれている「状況」を擦り合わせることで泣きを「解釈」していると考えられる。そして, そのような認知プロセスに基づいて対処行動の選択をしていると推測される。

2. カテゴリーの頻度からみる各月齢の泣きに対する父親の認知プロセスの特徴

本研究では、泣きの認知プロセスについて詳細に検討することを目的としたことから、以下の分析では「知覚」「状況」「解釈」の3つのカテゴリーに焦点をあて、2ヶ月と4ヶ月の〔在室場面〕〔不在場面〕における各カテゴリーの頻度から泣きに対する父親の認知プロセスの特徴を検討した。各場面のエピソード数は同数でなかったことから、各場面のエピソード数に対して語られたカテゴリー数の割合を算出した後、頻度が20%以上であるものに言及して検討を行った。

2ヶ月の〔在室場面〕では、「知覚」の中で〈声の特徴〉が多く、「状況」では〈時間：時間経過, 日課〉の語りが多かった。また「解釈」では〈生理的欲求：空腹, オムツ〉が全体的に多かった。この結果は2ヶ月において母親が近くにいるときに、父親が〈声の特徴〉と〈時間〉から、泣きの原因が〈生理的欲求〉であると解釈することが多いことを示しているといえる。2ヶ月の〔不在場面〕においても〔在室場面〕とほぼ同様の傾向であり「知覚」の中で〈声の特徴〉が多く、「状況」では〈時間：時間経過, 時間帯, 日課〉の語りが多かった。そして「解釈」では〈生理的欲求：空腹, オムツ〉が多く語られた。これらの結果から、父親はいずれの場面でも、子どもが泣いたときに「知覚」と時間的な「状況」を擦り合わせて、泣きの原因が〈生理的欲求〉であると解釈することが多いことがうかがえる。田淵(1999)は、母親の泣きへの反応を検討した研究で、生後数ヶ月頃までは子どもの泣きは生理的欲求が中心であったことを報告した。本研究結果において2ヶ月の泣きの解釈で母親と同様の結果が示されたことは、父親が子どもの欲求に対応した認知プロセスを形成していること示唆するものといえる。その他「状況」の下位カテゴリーに〈母親の助言・準備〉があったことは、父親の認知プロセスの特徴といえる。この結果は母親の不在中に父親が泣きを解

釈する際、母親のサポートや情報共有が重要となることを示唆するものとする。一方で、両場面で〈解釈しない〉が3割程度あったことは、子どもが泣いていても積極的に介入しようとしなない父親が一定の割合いることを示すものであり注目すべき点である。この結果は、母親を対象とした研究では、認められない結果であったことから父親に特有の認知プロセスといえるだろう。

4ヵ月の〔在室場面〕では「知覚」の語りで〈声の特徴〉と〈子どもの様相〉がほぼ同じ割合で語られた。「状況」では〈時間：日課〉が最も多く、次いで〈一人〉が多かった。「解釈」では〈社会的欲求：母親〉〈眠たい〉の順に多く語られていた。これらの結果から、4ヵ月において、父親は〈声の特徴〉と〈子どもの様相〉から泣きを知覚すると同時に、子どもが置かれた状況や育児の日課と擦り合わせて解釈をしていることが窺える。〈子どもの様相〉の語りが2ヵ月より若干増加していた点は、子どもの成長により泣き方に変化があらわれたこと、泣き方に父親が意味づけを行っていることによるものと考えられる。4ヵ月の〔不在場面〕でも、〔在室場面〕と同様に「知覚」の語りで〈声の特徴〉と〈子どもの様相〉が語られた。「状況」では〈時間：時間経過〉が多く、次いで〈一人〉が多く語られていた。そして「解釈」では、〈母親〉、〈解釈しない〉が多く、次いで〈眠たい〉と〈行動傾向〉が多く語られた。全体的に4ヵ月では父親の泣きの解釈は、〈生理的欲求〉による泣きの解釈が2ヵ月より少なく、〈社会的欲求〉による解釈が多かった。この結果は母親の4ヵ月から5ヵ月の泣き声に対する反応と一致するものであった（田淵・島田・坂井・炭谷，1998）。一般的に4ヵ月頃になると、子どもの成長に伴い1回の授乳量が増加することから、1～2ヵ月の頃に2～3時間おきであった授乳間隔が長くなり空腹による泣きそのものが少なくなる。当然、授乳の前後に行われるオムツ交換の回数も少なくなる。一方で、4ヵ月は子どもの社会認知能力が発達し、初期の愛着が形成される時期でもある。本研究結果における父親の泣きに対する「解釈」の変化は、2ヵ月から4ヵ月にわたる子どもの身体的・心理的発達に対応した変化であり、子どもとのかかわりのなかで父親の認知プロセスが発達することを示唆するものと考えられる。

3. 特徴的なエピソードにみる泣きに対する父親の認知プロセス

Table 2に2ヵ月と4ヵ月の〔在室場面〕と〔不在場面〕に特徴的なエピソードをまとめた。以下、各場面のエピソードの夫婦及び父親の語りについて時間軸に沿って検討した。

2ヵ月の〔在室場面〕：エピソード1（ケース①）は休日の夕方、キッチンで母親が家事をしている最中に、父親と子どもがリビングでテレビを見ているときのエピソードである。ケース①の父親は、まず「何かした時（オムツ）は低い声」という声の特徴から泣きを知覚すると同時に「オムツのこの色（中央のライン）」から、〈オムツ〉か〈眠たい〉が原因である

Table 2 2ヵ月と4ヵ月の子どもの泣き場面（同室場面・不在場面）での特徴的なエピソード

ケースID エピソードNo	泣きのエピソード	
2 ヵ月	母同室	
ケース① e1	F: <u>低い声</u> で泣くよね。M: 低い声。F: 何かした時（オムツ）は <u>低い声</u> で。M: うん。F: 単純に眠たいのと…。オムツのこの色（中央のライン）で。何となく泣きかたで何を求めとるかね…10時ぐらいに飲ましたよね。M: うん。F: だから、おっぱいじゃないんだなっていう感じ。 <u>ミルクをあげたのは知った</u> 。オムツ替えて…。で、それでもちょっと泣きやまなかったけえ、眠たいんだなと思って交代で抱っこしながら。	
ケース⑥ e9	F: お風呂上がりのおっぱいをあげるタイミングで、『 <u>ウエー</u> 』が始まって。おっぱいしかない。（母親が）おるけえ、任しときゃいいなって、仕事に向かっていた。M: 私が子どもに一人語りをしよるんかな。「そうね～お腹すいたね。」F: （母親の語り）を聞いてました。	
母不在	ケース③ e19	F: 『 <u>フエフエ</u> 』と泣きだした。時間と声のトーンだけ。腹が減ったか、眠いか、しっこかうんこ、っていうイメージ。しっこは一番声がかい、声のトーンが違うけえ違うわって思っで。眠いような時間でもないし。パッと時計見たら3時間たつとる、腹が減ったんじゃって…。ミルクつくって飲ませた。（最後の授乳を）見とったけえ、「ちょうど3時間じゃあ」と思っで。ぴったり3時間で泣きだすんで。M: 授乳した時間だけは伝えました。「あげてね」って。
ケース⑥ e23	F: （おもむつを替えた後）しばらくすると泣きはじめて、声が聞こえて□をチュパチュパしとった。オムツ交換した後だったし、時間的にミルクだろうなって。こういうとき（口をチュパチュパする）がミルクのサインと妻から聞いたとったんで。もうすぐ（母親が）帰ってくる時間だったのであやして待っていた。	
4 ヵ月	母同室	
ケース② e34	F: 顔が…もう耳まで真っ赤になるんですよ。明らかに腹が減ってるなみたい。M: うん。全身で泣いとる感じよね？お腹空いてる時はね。F: 全身で泣いてる。M: うーん。F: （他の泣きかたの時とは）違う違う。僕が抱っこしたら泣くんです。M: で、私が抱っこしたら泣きやむ、みたい。えへっ。何回かそれが。F: ミルクあげても。僕のは、 <u>断固として飲まない</u> 。お母さんのミルクがいいんですよ。M: ニコニコしとる時は抱っこするけど、泣いとる時はあんまり抱っこしたくなくて。	
母不在	ケース③ e37	F: 11時ぐらい？寝る前、大抵よう泣きよる。 <u>ギャン泣き</u> されたら「はあっ」ってなりますね。眠い？M: うん。もう何か、全部お風呂も入って…。全部落ち着いたら…。もう寝かせる状態で「ヤッ！」ってもう激しくなって。F: （母親に）任せます。自分がやってもダメなんで。
ケース④ e51	F: <u>切ない顔</u> みたいになってきて、しまいにはもう、泣きだして…。もう全然ダメになっちゃってですね。15分…20分ぐらいですかね、そのあとはまあ、抱っこしながら…こーう…飲ませながらみたくいなのでやったら…。一応口はつけるんですけど、それでもすぐ <u>真っ赤な顔で嫌が</u> ってですね…。お腹がすいている時間ではあったんですがね。家では（哺乳瓶では）全然飲まない。哺乳瓶が嫌だったとしか考えられない。	
ケース⑤ e53	F: いつも通り <u>クスンクスン</u> から始まる…抱っこしたらもう結構泣きだす。抱っこして置いたらもっと大泣きなんで。抱っこして、ずーっとユラユラしながら歩きながら…。もうギャーギャーギャーギャー泣いて。最後は大泣きですよ。お母さんなのかなあ。ミルク…じゃないのは何となく。（母親が）出ていく前に飲んでたし、オシッコの時はそこまで泣かないし…。オムツとってかいてあれは考えはもうないかなあ。	

注1: Fは父親の語りで、Mは母親の語りを示す。

注2: 二重下線は「知覚」、一重下線は「状況」、太字ゴシック文字は「解釈」、斜体文字は「対処」を示す。

と解釈した。また、「10時ぐらいに飲ましたよね…だから、おっぱいじゃないんだなっていう感じ。ミルクをあげたのは知った」という自身が把握している授乳時間によって可能性のある泣き原因の中から即座に〈空腹〉という原因を消去することで〈オムツ〉か〈眠たい〉のどちらかが原因であると解釈した。そして、その解釈を基に対処行動としてまずオムツ交換をする。しかし、子どもが泣き続けることから〈オムツ〉を原因から消去し、最終的に〈眠たい〉が原因であると確信し、母親と交代で抱きながら子どもを寝かしつけエピソードが終了した。

2ヵ月の〔不在場面〕: エピソード19（ケース③）は、母親が友人とランチに出かけ、父親が留守番をしているときのエピソードであった。ケース③の父親は『『フヘフヘ』と泣きだした』『しっこは一番声がかい、声のトーンが違う』という声の特徴によって泣きを知覚し、まず〈オムツ〉を原因から消去した。その直後に「眠いような時間でもないし。パッと時計

見たら3時間たつとる」という状況から原因が〈空腹〉であることを確信した。そして、〈空腹〉という解釈を基に父親はミルク授乳をしてエピソードは終了した。時間経過を確認する際、「M：授乳した時間だけは伝えました。『あげてね』って」という母親の助言や準備があったことは、不在場面の特徴といえる。

これらのエピソードの語りからも2ヵ月において父親は子どもが泣きだしたのとほぼ同時に泣きの「知覚」と時間経過などの「状況」とを擦り合わせて、原因を「解釈」していることが窺える。さらに、その認知プロセスにおいて子どもが泣き続けた場合は柔軟に解釈を変更して対処している様子が見えがえた。これらの結果から、2ヵ月において母親と同様に父親が子どもの欲求に対応した認知プロセスを形成していると考えられる。さらに父親の認知プロセスには母親との育児に関する情報共有が関与していることが示唆されたといえる。

4ヵ月の〔在室場面〕：エピソード34（ケース②）は、親子3人がリビングルームでくつろいでいるときに子どもが泣きだしたときのエピソードであった。ケース②の父親は「顔が…もう耳まで真っ赤になる」「全身で泣いてる」という〈子どもの様相〉から泣きを知覚し、すぐに〈空腹〉が原因であると解釈した。そして対処行動としてまず抱っこをしてからミルク授乳を試みた。しかし、「僕が抱っこしたら泣くんです。…ミルクあげても。僕のは、断固として飲まない」と語るように、父親は子どもが泣き続けることで泣きの原因が単なる〈空腹〉ではなく、〈母親〉が授乳することを期待する泣きであると解釈した。この解釈の修正によって父親は母親と交代し、その結果子どもが泣き止みエピソードが終了した。

4ヵ月の〔不在場面〕：エピソード53（ケース⑤）は、子どもが寝ているときに自宅に遊びに来ていた友人を母親が駅まで送りに行っている30分程の間、父親が留守番をしていたときのエピソードであった。ケース⑤の父親は、「クスンクスンから始まる」という〈声の特徴〉で泣きを知覚する。そして抱くという対処行動をとる。しかし、子どもは泣き止まず「ギャーギャーギャー泣いて。最後は大泣きですよ」という変化した泣きの知覚と「ミルク…じゃないのは何となく。（母親が）出ていく前に飲んでたし」という〈時間経過〉から〈母親〉がそばにいないことが泣きの原因であると解釈した。「解釈」が〈母親〉であったことから父親は抱いてあやしたりなだめることしかできず母親が戻ってくるまで子どもは泣き続けたというエピソードであった。

これらの父親の語りから4ヵ月においても父親は「知覚」と「状況」を擦り合わせて泣き原因を「解釈」していることが窺える。さらに4ヵ月のエピソードの特徴として〔在室場面〕と〔不在場面〕で〈社会的欲求：母親〉による解釈が語られたことは、父親が4ヵ月の子どもの発達に対応した認知プロセスを形成していることを示唆するものであると考える。

全体的考察

本研究の目的は、子どもの泣きを父親がどのように受け止めて原因を解釈しているかという認知プロセスについて、日常的な家庭場面における泣きに焦点を当てその詳細を明らかにすることを目的とした。泣きに対する父親の語りは「知覚」「状況」「解釈」「対処」の4つのカテゴリーによって構成されていることが示された。さらにそれぞれのカテゴリーは下位カテゴリー・サブカテゴリーから構成されていた。これらの結果から父親は子どもが泣いたときに「知覚」と「状況」を擦り合わせることで泣き原因を「解釈」し、その「解釈」を基に「対処」していると考えられる。特に〈状況〉の語りに〈時間経過〉や〈日課〉が多かったことから、日々の子どもの関わりの中で実際にケアをしたり、母親のケアを間近で見聞きすることが泣きの認知プロセスの形成に関与していると考えられる。そして、2ヵ月の〔不在場面〕において、〈母親の準備・助言〉が語られていた点は、父親の初期の認知プロセスにとって夫婦で育児情報を共有することが重要となることを示すものとする。エピソードの中では、多くの母親が子どもから離れる前に授乳を済ませて計画的に外出をしていることが語られた。夫婦の養育行動にとって母親の調整が有効となることが指摘されるように（青木, 2009）、父親の認知プロセスという心理的側面にも夫婦の情報共有だけでなく母親の調整能力が重要な意味を持つことが推察される。

「何も考えなかった」「赤ちゃんは泣くもの」という〈解釈しない〉が一定の割合あったことは、母親の認知プロセスでは認められなかった結果であり新たな知見といえよう。但し、この傾向が個人要因によるものなのか、一般的な父親の傾向なのかについては明らかにすることができなかった。〈解釈しない〉が語られた理由の一つとして、一般的に育児において父親が二次的養育者である点が考えられる。本研究では、調査時における育児の一次的養育者は全員母親（専業主婦1名、育児休暇中8名、学生1名）であった。したがって、何かあっても「母親が何とかしてくれる」という母親への依存から、〈解釈しない〉のカテゴリーが語られた可能性がある。しかし、〔不在場面〕でも〈解釈しない〉が一定数あったことについて、「赤ちゃんは泣くもの（ケース⑩）」「少しは泣かせた方がいい（ケース①）」という語りがあったことから、母親要因以外に父親の生育歴や性役割観など他の要因が関連している可能性がある。今後、家事・育児の関与度や仕事環境、夫婦関係の要因、父親の生育歴や性役割観など父親を取り巻く様々な要因と認知プロセスとの関連を検討することで、〈解釈しない〉の背景要因には何があるのかを明らかにするとともに泣きに対する認知プロセスの形成・発達に影響する要因を明らかにする必要がある。

本研究の第2の目的は、2ヵ月と4ヵ月を比較することで泣きの認知プロセスの発達につ

いて検討することであった。2ヵ月と4ヵ月の〔在室場面〕〔不在場面〕における泣きに対する父親の語りの各カテゴリーに変化が認められ、その変化は母親と同様の傾向であった。さらに、特徴的なエピソードの語りからも父親の認知プロセスが2ヵ月と4ヵ月の子どもの発達の特徴に対応したものであることが示された。これらの結果から子どもの発達に伴い泣きに対する父親の認知プロセスが発達することが示唆されたと考えらえる。今後の課題として、父親の泣きに対する認知プロセスがその後の養育行動や子どもの発達に影響するののかについて明らかにすることで、認知プロセスという心理的側面から子どもとの関わりにくさを感じる父親を支援する方法を見出していきたい。

追記

本研究はJSPS 科研費（基盤研究C：課題番号16K12103）の助成を受けて実施された。本研究の実施にあたりご協力いただいたご家庭の皆様にご心から感謝申し上げます。

引用文献

- 青木聡子（2009）. 幼児をもつ共働き夫婦の育児における協同とそれにかかわる要因：育児計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して 発達心理学研究, 20(4), 382-392.
- Bell, S., & Ainsworth, M. D. S. (1972). Infant crying and maternal responsiveness. *Child Development*, 43, 1171-1190.
- 平嶋慶子（2007）. 各時期の特色：乳児期の特色. 山内光哉（編）, 発達心理学：周産・新生児・乳児・幼児・児童期 (pp. 32-37). 京都：ナカニシヤ出版.
- Gustafsson, E., Levréro, F., Reby, D., & Mathevon, N. (2013). Fathers are just as good as mothers at recognizing the cries of their baby. *National Communications*, 4, 1-6.
- 陳 省仁（1986）. 新生児・乳児の「泣き」について：初期の母子相互交涉及び情動発達における泣きの意味 北海道大学教育学部紀要, 48, 187-206.
- 神谷哲司（1999）. 乳児の泣き声に対する親の認知と対処行動 家族心理学研究, 13, 103-114.
- 神谷哲司（2002）. 乳児の泣き声に対する父親の認知 発達心理学研究, 13, 284-294.
- 正高信男（1989）. 乳児の泣き声研究の展望 心理学評論, 32(4), 407-420.
- 難波寿子・松岡 恵・川越 厚（1997）. 母親が新生児が泣く理由を判断する要因の経時的変 母性衛生, 38, 382-388.
- Sander, W., & Julia, H. L. (1966). Continuous interactional monitoring in the neonate. *Psychosomatic Medicine*, 28, 822.
- 嶋田容子・板倉昭二（2007）. 乳児の泣き声への母親の解釈 母性衛生, 48, 337-339.
- Tabuchi, N., Shimada, K., Kameda, Y., Sekizuka, N., & Sakai, A. (2008). Mother's feelings of distress and related factors resulting from the crying of her one-month-old infants. *Journal of Japan Academy of Midwifery*, 22, 25-36.
- 田淵紀子（1999）. 新生児の鳴き声に対する母親の反応 日本助産学会誌, 12, 32-44.
- 田淵紀子・島田啓子（2006）. 生後1ヵ月から1年までの乳児の泣きに対する母親の情動反応に関する縦断的研究 日本助産学会誌, 20, 26-36.
- 田淵紀子・島田啓子・坂井明美・炭谷みどり（1998）. 生後4～5ヵ月児の泣き声に対する反応 日本助産学会誌, 12, 76-79.
- Wikander, B., & Theorell, T. (1997) Fathers' experience of childbirth and its relation to in his infant. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 11(3), 151-158.

Abstract

Characteristic in the Cognitive Process of Fathers in
Response to Infant Crying

Saori Koyama¹, Masako Moriyama², Sachiko Kobayashi³,
Tomoko Obara⁴ and Yasuyo Nishino¹

The purpose of the present study was to examine fathers' cognitive process in response to infant crying and to investigate how this process changes from the age of 2 to 4 months.

The study participants were 10 pairs of parents with a 2-month-old infant at the start of the study. Joint interviews were conducted with each couple at their home when their infant was 2 and 4 months of age. The interviews consisted of questions on infant crying under two different situations: when both parents were in the same room (situation 1), and when the mother was absent (situation 2)

The father's narrative about infant crying consisted of four categories: "perception," "situation," "interpretation," and "Coping behavior." At 2 months of age, the most reason for infant crying, as interpreted by the father, was a "physiological need" (i.e., hungry, nappy, sleepy). At 4 months of age, the infant's "physiological needs" had decreased and the father more frequently interpreted the cause of crying to be a "psychosocial need" (i.e., anxious, attention seeking). In addition, similar to mothers "cognitive process in response to infant crying," it was revealed that fathers also interpreted the cause of infant crying from "perception" and "situation."

Another feature of the fathers' cognitive process was that there were a few "no reason interpreted" at both ages. However, there were a certain number of fathers who did not perform cognitive processes. Therefore, we consider that this result is due to individual factors within the fathers rather than a tendency in fathers in general.

Keywords: Fathers, Perception of infant crying, Joint interviews

¹Hiroshima Shudo University

²Aichi Konan College

³University of Shizuoka

⁴Okazaki Women's university